

第1回長野市の幼児期の教育・保育の在り方検討委員会

- 日時：平成27年7月23日（木）
- 場所：長野市役所 第2庁舎10階17会議室
- 出席者 委員9名、事務局16名

1 開会

2 加藤長野市長挨拶

（加藤長野市長） みなさま、こんにちは。長野市幼児期の教育・保育の在り方検討委員会の設置に当たり、委員へのご就任をお願いしましたところ、大変お忙しい中お引き受けいただき、心からお礼申し上げます。日ごろは幼児教育に対しまして、大変なお力をいただいておりますこと感謝を申し上げたいと思います。将来の子どもたちを育てる、これは私どもの使命だと思っているわけです。実は、教育県長野と言われてから久しいわけですが、今の長野県の小中学校の体力・学力をみますと、皆様ご存知のように全国の真ん中程度に低迷しておりますわけでございます。本来であれば、県都長野市がその中でも引っ張っていく立場なのですが、現状を見ると、小学生は県レベルよりちょっと高いのですが、中学生については県のレベルの足を引っ張っているということでございます。特に中学生の女子の運動能力については、全国でも下位に近いという状況でございます。その中で中学生になってから急に運動しろ勉強しろといってもこれはなかなか難しいわけございまして、やはり、幼児のときから、運動・集団での生活を含めて、小学校に上がるまでが、ある意味勝負だと私も重要視しております。

実はこの間、高校生にアンケートをとり、「将来、あなたはどうしますか。」という問いに、「長野市には帰ってこない。」という人が6割もいるんですね。今の高校生の段階で、長野は、そんなに魅力がないのかなと、私も非常にショックを受けました。コミュニティーの問題、家族間の問題、こういうものを含めてもう一度見直しをしていかななくては行けないと、改めて強くショックを受けたわけでございます。それにつきましても、幼児から特に小学校に上がる前、今まで、教育委員会は、どちらかというと小学生から中学生までということで、なかなか幼稚園まで口を出してこなかった。また、幼稚園・保育園・認定こども園と、これも3つあるわけございますが、それも、管轄が、文科省・厚労省・内閣府と国もばらばらだと。こういうような状況の中で、小学校に上がると、小1プロブレムといういろいろな問題があるようございしますが、何とか、長野市の子どもたちは、学校に上がる時には、ある程度、集団行動ができて、落ち着いてくるようにと、このような思いもあるわけでございます。

皆様におかれましては、長期間2年間ということございしますが、お時間をいただき、様々なご意見をいただきまして将来の子どもたちのために、是非お力をお貸しいただきたいと思っております。

3 委員委嘱

4 自己紹介

5 委員長・副委員長選出

6 委員長・副委員長挨拶

(委員長) よろしくお願ひいたします。長野の幼児期の教育保育の在り方を検討していくということで先ほど市長からもお話がありましたけれども、やはり就学前の保育・教育の在り方でどういうことが大事かということを下から積み上げていくことが、今、すごく大事ではないかと思ひます。そういう点で限られた場かもしれませんが、委員の方々の率直なご意見を是非交わしていただきながら、長野市らしい、いい指針ができればいいのではないかと思ひますので、ご協力をよろしくお願ひしたいと思ひます。

(副委員長) 大変不慣れではございますが、委員長を助けながら、やっていきたいと思ひます。皆様のご協力、よろしくお願ひいたします。

7 諮問

8 議事

(委員長) これより、会議の進行を務めさせていただきますので、よろしくお願ひいたします。

まず、議事に入る前に、長野市執行機関の附属機関の設置等に関する条例第6条第2項の規定に「附属機関は、委員の半数以上が出席しなければ、会議を開くことができない。」とございます。本日は、9名の委員方がお出席しておりますので、会議が成立していることをお伝えいたします。

では、議事の(1)長野市幼児期の教育・保育の指針策定方針について、事務局から説明をお願いします。

<事務局説明>

<質疑>

(委員長) ありがとうございます。大きく2つくらいに分けて質問を取るよういたします。まずは、資料1の「長野市幼児期の教育・保育の指針策定方針(案)」につきまして、その資料について先に質問等をとります。後半のほうは、「基本計画」と「しなのきプラン29」ということで質問をとります。先に資料1のところ、ご質問等ある方はお願ひし

たいのですが、いかがでしょうか。

資料1の左下の太い破線で結んである部分、幼児期の教育保育のための指針を作っていく、そのあたりが、この委員会の役割だということはお分かりかと思いますが、あと、裏側にいって、29年度から33年度まで、5年間に必要な見直しを重ねながら、指針を準備していくということです。当面はそのあたりになろうかと思いますが、いかがでしょうか。

こちらの資料に関しては、大体よろしいでしょうか。

今年度及び28年度までを含めたスケジュール案が示されていますが、実際これから、皆さんで議論しながら、多少、流動性のあることが出てくるかもしれませんが、資料のほうはよろしいですか。

後半、事務局からお話をいただきました。私なりの捉え方で簡単に振り返りますと、「教育振興基本計画」をどういう風に具体化するかというプランが、この「しなのきプラン29」であり、その内容が、いろいろとポイントをもって示されたものだろうと思います。人間が生まれてから、乳児期から18歳までの育ちや学びの連続性ということ全体では描きながら、特にこの委員会としては、就学前のところ、どういう力をつけていこうか、この間ずっとご準備されたこのプラン等の説明だったと思います。事務局の説明いただいたこの2点に関して何かご質問等あれば、お願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

では、私から1点質問させて欲しいのですが。「しなのきプラン29」の概要版の中の右上の長野市の課題ということで、特に中学生あたりのことを3点程度いただいております。先ほど運動の能力というか体力的なことというお話がありましたが、中学あたりのことで課題をもうちょっと補足していただけるとイメージが湧くと思うのですが、何かありましたらお答えいただきたい。

(事務局) お手元の本編、冊子をご覧いただきたいのですが、3ページ、中学校が右上に書いてありますが、知識・理解・活用力という、A・Bと定義した学力についてですが、その上のところに長野市の平均得点が出ています。それと、全国・長野県を比べていただくと、特にそのB問題、知識を覚えてどう使うかという部分、表現をしたり、活用をしたり、判断をしたりそういう部分が問われる問題に特に大きな課題があると思われま。4ページのいわゆる意欲・態度と言われる部分ですが、実は、全部でこの学力テストの中では、74項目質問が子どもたちに出されています。その74項目の中で、得点と相関を全て取りました。相関関係が強い質問を取り出して、その中で特に、全国と比較したときに、長野市の子どもの弱部分、優れているところを見ていただくには、4ページが非常にわかりやすいと思うのですが。100を下回っている数値が多ければ多いほど、力がついていないという風に思います。右側の中学校で見ていただくと、例えば、一番下の実践力、これを現しているのは、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか。」という質問ですが、対する中学生の答えは、全国に比べると88パーセント。

あるいは、いわゆる小学校・中学校で行われる「総合的な学習の時間」、ここは、そういう学習に取り組んでいますかという質問ですが、こういう部分から身に付けた力を実際に、実生活、あるいは地域社会で、地域貢献として、働かせる力が弱いのではないかということがこれで見て取れると思います。一番下の青い部分の枠の中にまとめさせていただいています。それら調査結果をまとめた部分を端的に示したものがこの課題であるにご理解いただければ。

(委員長) ありがとうございます。委員の皆さん、どんなことでもいいと思うのですが出していただければ。

(委員) 平成26年4月22日実施、小学校が3,530名、中学校が3,170名。私学を除いているから少なくなっているということでしょうか。

(事務局) はい。

(委員) そのあたりについては分析はされていない。

(事務局) そうですね。

(委員長) 他にはありませんか。

(委員) 聞き落としたかもしれないのですが、このプラン29の表紙のところにあります木の図なんです、これが18歳になったときに凡そ完成していて欲しいなというような意味合いでとらえればよろしいでしょうか。

(事務局) はい、若木の段階から日光を浴びて、成長していくそんなイメージと重ねていますので、できれば、18歳をひとつのゴールとして大きくなって欲しいという願いをこめています。

(委員) 根っこのところが特に幼児期という意味ではないのですね。

(事務局) はい。

(委員) 今お話がありましたように、それにつけても長野市の教育の中で、特にC学力を非常に大事に思っているなということは非常に重要なことだと思いますが、C学力を基本的に育てていく一番の元というのは、いわゆる幼児期の教育、育ちだろうと思

うので、そこの辺に注目して、子どもは検討していけばいいということなのでしょうか。

(事務局) 個人的な意見は控えたいのですが、私も委員が今仰ったように、この根っこの部分を育むことが、教育にとっては、非常に大事な基礎・基盤になると思っていて、そこは、どういう風に就学までのところで培っていただけるか、というところは非常に大きいのではないかと思っています。

(委員長) 他にはどうでしょうか。もしなかったら、意見交換の中で触れていただいても結構ですので、その中でまたご質問をいただきたいと思います。

委員の方々は、市内の幼稚園、保育所、こども園あるいは、市民の方、教育関係の方、小学校の先生もいらっしゃいますので、それぞれのお立場のところから、就学前の保育や教育の在り方を考えるときに、どういう点が一番問題だと思うかというところを率直にご意見をいただきたいと思っています。どんな角度のことからでもかまいませんので、それをフリーに出し合う中で長野市の幼児期の教育や保育の中で、この点が、やはり問題ではないかというところを率直にお出しいただきたいと思います。皆さんから、意見を聞くということが必要だと思うので、特に時間は区切りませんので、どんな内容でも結構ですのでご発言いただければ。

(委員) しなのきプランの冊子の方、4ページの実践力のところにある3番目、「総合的な学習の時間」では、というところですが、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか”というところが、小学校から中学校に行くにしたがって下がっていますが、今、ちょうど、短大の学生に、自分でテーマを設定して、この夏休みに何を調べたいのか、保育現場もお邪魔して勉強させていただく機会になっているのですが、何を勉強していきたいのかということ計画を立てて、実際に実践をして、夏休みが終わった段階で報告してくださいという課題を課しております。このことを相当授業の中でやっているのですが、これができなくて、頭を抱えています。学生たちに、課題を見つけて、計画を立て、実践をして、まとめるということを今までにやったことがあるか聞いたところ、あまり経験がないというようなことで。それぞれの経験の差という物はあるかもしれませんが、この手法を持ち合わせていないということと、何をテーマにしたらいいのかといったときに、ある程度の基礎的知識がないとできないと思うのですが、それもままならないというような状態です。あまり、学生の悪いところばかり言うと嫌なのですが、家庭での学習は、どの位やっているのかというところも驚くような状況です。そこのところを短大に入学してから、家庭学習を確保すること、基礎学力をある程度向上させていくことから始めているようなわけで、この数字を見たときに、まさに短大生の姿を見て、これは本当に深刻だなという風に思っています。学生たちは、非常に意欲は持っていて、保育者になりたいという強い希望を持って勉強をして、2年間

である一定の水準にはいくのかなと思うのですが、始めのこのところが、この木の18歳に描いているようなこの状態で、ある程度確保された上で専門的な勉強を始めていけば、もう少し何とかなっていくと思っています。実際にこの18歳の姿を私は、日々感じております。感性の豊かな学生が多いので、いいなと思う部分と、学力の部分、今、全国的に問題になっていますが、この部分をどのように確保していけばいいのか。学力というものを身につけていくのは、難しいと思うので、何を基盤として育てていけば、子どもたちが育っていくのかということの追求をしていかないと。広くたくさんものを身に着けていくことは大変なので、核になるものがあるはずなんです。それが何かを追求しなければならない。それを実現させていくものが、幼児期の遊びの中にあると思っています。遊びと言いましても、ただ遊ばせていけばいいわけではないので、どういう質の遊びを保障していくと、その基盤が育つのか、というような目で、実際の子どもの様子をよく見て、専門の先生たちがそれをどう実践していくかということをもっともっと練っていかなくてはならないということを日々感じています。

(副委員長) 一点、お聞きしたいのですが、長野市教育大綱が最初にできたのは昭和62年ということで、その後平成23年12月に改定されたということですね。私どもの手元に改定された大綱が届いていないので、もしできましたらば、幼稚園連盟の方にも資料をいただければ大変ありがたいのですが。この初版のときの内容を見ますと、小中学校の教育の重点、それから、諸教育指導の重点、それから、高等学校指導の重点、それから、家庭教育という項目に分かれているのですが、幼児教育というのは、どこに出ているのかなと思いましたが、最後の方に、社会教育の重点の中で乳幼児の社会教育ということで、1ページの中で5～6行くらいしか載っていませんでした。それが23年度に改定になったときに、どのように幼児教育を捕らえて改定になっているのかわからなかったのも、今日お聞きしたいと思ったのですが。

(事務局) 副委員長が仰った、最初のいわゆる教育大綱は学校教育を中心に組み立てられていました。それが、法律によって、教育振興基本計画を自治体が持たなければならないと規定されたものですから、そのときに、学校教育関係と生涯教育関係と文化芸術スポーツ関係という大きな柱を立てて位置づけました。学校教育関係の中の次世代を担う子どもたちの生きる力の育成というところにひとつの柱として、幼児期からの段階に応じた教育の充実という柱を据えております。その中に幼児期の教育の充実というところがあるのですが、掲げては見たもののそれを具体化するというのがなかなか手を付けてこれなかったところでもあります。それが今年、未来部と共同してやっといこうということになりましたが、さほど大きな項を裂いてやっといこうということではないです。

(副委員長) そういうことで、もう少しこの会が、幼児教育のほうに発展していくような

形になれば、大変うれしく思います。加藤市長に変わられて、私ども幼稚園連盟の方にも目を向けていただいております。そのなかで、新たに認定こども園もできまして、幼稚園連盟と一緒にやっているのですが、私立保育園の方たちにもこういう場で会うことが大変多くなってきました。以前あまりそういう交流がなかったのですが、こういう場所でいろいろな方にお会いできて、もっともっと、幼稚園、保育園枠を越えて、お互いに連携ができるようになることが良かったと思います。

(委員) こういうお話を進めるには、ゴール設定がないとと思っていたのですが、今日お示しをいただきました「しなのきプラン」で明確に打ち出されているのではないかと思います。というのは、18歳、こういう人間であるべきだということが、単に学力とかそういう狭い範囲の問題ではないと感じました。保育園に身を置くものとしていつも感じているのは、幼児教育というのは結果が見えにくい。何年か先というような印象があります。ですから、将来の子どもたちがどういう風に育っていくか、どういう風になって欲しいかということをきちんと私たちは、勉強をして、世間一般に対して、親御さんに対して、これからなおさらいっそう、説明責任を果たしていかななくてはいけないなということを日々感じております。

6月27日の長野市主催の研修会で、白梅学園の汐見先生の講演会がありました。その汐見先生の話が良いというか、腑に落ちたのですが、こういうことを仰っている。「昔の子どもは、当たり前のように、地域社会の子どもの集団で育ってきたことが、今の現代の少子化を生きる、またいろんな社会情勢の中での子どもにとってはそういうことは難しい状況にある。ですから、幼児教育、幼稚園、保育園で意図的にやっていかなければいけないことがある。これは昔から違って来たことである。私たちに課せられた役割として、昔と違って増えたことである。」というお話がありました。具体的には、‘人間力の基本‘という表現をされて、身体のしなやかさ、工夫力、企画力、レジリエンス、協働力、社会性、規範意識、忍耐力、意欲、夢描き力、危機管理力、役立ち感、帰属意識、宗教性の基礎、そこを、きちんと育てた上で、汐見先生は、「持続可能な形で未来に繋ぐことができる力、グローバルな知性と行動力を併せて育てていかなければならない。」と仰っています。基礎と上物を一緒に私たちは、今の時代は育てていかななくてはならないというお話、とても勉強になりました。それを育てていくうえで、「丁寧さ」というキーワードを挙げられて、一人ひとりと丁寧に関わっていきましょう。一人ひとり子どもを丁寧に保育していきましょう、教育していきましょうということを仰っていました。まさに、先ほどから学力という言葉が出ているのですが、ただ学力だけ付けても、将来きちんと働いて、納税をして、一社会人としてやっていけるかどうか、そういう問題であります。学力がただ上がったからといって働けないとか、あるいは、今、青少年の自殺というのが増えていますけれども、そういった問題がある。あるいは、さっき市長が仰ったように、首都圏へ流出してしまうという問題がありますね。私たちは、もうちょっと上の部分で考えていかななくてはいいな

い。将来的に私たち、幼児期から学校に上がるまでの教育機関が、長野市に生まれた子どもたちを一人一人丁寧に育てていって、それで長野市を愛してくれるようになって、将来長野市で仕事をして、長野市に貢献をしたいという風になって欲しいと。そこまで私たちは考えていかなければいけないのではないかなと思います。小手先ではなく、きちんと丁寧に、丁寧にやっていく必要があるのではないかなという風に思っています。

(委員) 私、今日話を聞きまして、認定こども園ですから、0歳から就学前まで、うちは、ちょっと規模が大きいんですけども、380名強いるのですが、一つ目は、先ほどの学習意欲というところがありましたけれども、学習だけではなくて、自分の目の前にある課題ですとか、生きていくことに対して意欲的、前向きに自分を信じて生きていけるように、というそんな気持ちを持って小学校へ行ってくれたらなということも思っていて、子どもたちと接したり、先生と接しています。毎週、毎日、ほぼ私は会議に出るのですが、1学期のまとめということでそんな話があって、子どもたちにとっての困り感、何かしてみたいときに先生たちが、今、この子の発達状態はこうで、支援をちょっとかけあげると、ここまでできるよねというところを個別に丁寧にみていく必要があるでしょうね。そのときに、的確な支援なり、プロットが出ていないとやっぱりどうしていいかわからない、パニックになってしまう。自分でそのように周りの状況に働きかけるとできるんだというようなことが、幼児期に遊びを通して、友達のこれが欲しい、いきなりとるとけんかになってしまって、先生にいろいろ言われてしまう。でもそのとき、「貸してね。」って言う。当然のことなんですけど、それができて仲良くなれる。優しい言葉をかけたら、にこっとしてくれる。そんなような、生きていくうえでのスキル、そういうような人間関係であったり、自分が働きかけることによって、こういうようなことができたんだという、認められたんだということを強くもって将来生きていけたらな、といつも思います。保護者と話しているときも、1日たくさん遊んで、体をいっぱい動かして、おいしいものをいっぱい食べて、安らかに寝て、お父さんお母さんがいて、やさしく見てくれて、言葉にはしないけれども、「生まれてきて良かった。この人生は面白そうだぞ。」とってくれると思っただけで毎日やっています。そういう意味では、一つ目は、意欲とか健康ですとか、自分の働きかけによって、自分自身を持って小学校に行ってもらいたいなと思います。

もうひとつは、家庭のこと、今回「しなのきプラン」にありましたけれども、やっぱり、昔との違いをあげつつらってもいろいろでてるわけなんですけれども。お母さん、お父さんが子どもを育てていくことに、興味を持ったり、前向きになったり、自信をもってもらいたい。実はうちの園、手間がかかるんですが、ほぼ全家庭のお父さんお母さんと面談をするんですね。30分くらいです。海外から来たとか、県外から来たとなると1時間、2時間に及ぶ。面談といっても何をするかというと、雑談みたいなものなんです。うちの園は、7割、3分の2が市外、県外からです。小学校への接続でも大事なところだと思うのですが、いわゆる自分の子どもを預ける、うちの場合は、保育と教育を行う認定こ

ども園ですから、その両側面があります。そのときにお父さん、お母さんが、教育機関に預けるときに、どういうスタンスでお付き合いをしていけばいいんだという最初のスタンスを決めるパターン。私自身が面談をするのですが、まずは、お父さんお母さんと仲良くなる。難しいことなく、いろいろなことをお話できるようにしよう。その上で、「お父さんお母さん、この〇〇ちゃんを中心にして、子育てのチームが、今、形成されたんだよ。」0歳の子であれば、「6年間一緒に子育てしていきましょうね。」「何かあったら言ってくださいよ。」「私も何かおかしいことがあったら言うよ。」ということをして30分なりあるいは1時間なり話した最後には、そういう話しをするわけですね。家庭の教育力を何とかしていかなくてはならない。それに対しての知識なり、情報は提供していかなくてはならない。スマホの問題、メディアコントロールの問題、朝食の問題。私たち認定こども園と、ご家庭の人間関係みたいなのを密接に結んでおかないと、そのことがとても空虚になってしまう。今回、一緒にいい案ができればと思っています。

(委員) 自分が関わってきたこととお話させていただこうと思うのですが、この振興基本計画ができたときに、先ほど、事務局から話があったように、幼児期の教育の充実ということが入ってきたことの関連もありまして、学校教育課で幼保小の連携を考え始めたころと、ちょうど同じくらいの時期なのかなと思います。途中からは、未来部も一緒になって、幼保小の連携について、細々ながら取り組みをしてきて、4年目くらいになるが、今日出席していただいている園長先生方の保育園や幼稚園の先生方にも協力していただいています。その中で、始めのころは、文化の壁というようなお話もありましたけれども、職員間に相当の壁があって、私たち小学校職員も幼保園の先生方もお互いのことを知らなくて、始めの段階ではアンケートをとったら、正反対というか、批判的な意見も出てきたのです。でも、この3年から4年経つところで、協力園としてやっていただいた中で、長野市全体の小学校を7つに分けて、その中で1学期には、幼保園が小学校へ行って、入学してきた子どもたちの姿を見ていただく、秋は逆に幼保園へ小学校が行って、いよいよ入学する年長さんの様子を見ていただくという取り組みをしてきた中で、保育職員と教員とが、同じ子どもを育てているというそういう目で見えていかなくてはいけない、一緒に教育者なんだというところによりやく立ててきた手ごたえを感じています。連携会議の接続の在り方を長野市の中では、こういう冊子を作りながら、幼稚園や保育園の先生たちも、学校の職員も子どもたちを見る見方を共通にしていこうというところで、そういうときにも、子どもたちの姿を見て、実際の姿から話し合うようにしています。子どもたちには、保育園の時には遊びが大切で、小学校に来れば1、2年のところでは、生活科に繋がり、先ほども出てきた相互の繋がり、教科の中では、「しなのきプラン」にあった活用する力とか、思考力、判断力とか表現力を大切にする教育課程に変わってきています。私自身も保育園の先生方に知っている方が増えてきてうれしいですし、今までは、協力園とか協力校とかを設けてやってきましたが、これからは全ての長野市内の幼保と小学校でやろうというこ

とが今年目標であります。小学校に上がる段階で、子ども達には壁があります。それは、成長のための壁であって、それがなくてはいけないという感じで、それをうまく乗り越えさせるための、子どもの見方の共通性みたいところが、細々ながら下のレベルでは進んでいると感じております。具体的には、体力づくりに関係しては、公立の保育園で始まっていますよね。あの流れは、小学校のほうでもありますし、繋がっている流れができてきているなということを確認しながらおります。

(委員) 私どもは、主任児童委員とあって、子どものことをやっております、未満児の子育て支援を今やっております。未来部より先立って支援をやってきて、相談から子育て支援が始まったのですが、しなのきの幹の本当の下の芽が、出るか出ないかの頃の子どもたちを私たちは見ているのですが、本当に未満児の子どもさんは、親を見ている、周りを見ている。すばらしい観察力を持っている。今日は、幼稚園の園長先生方も見えておりますし、小さな子どもたちのことをうんと知って欲しい。子どもたちの目を見ると、澄んだ目で見られる。中学くらいになると、相手の目を見て話さなくなる。言葉で言えないようなことを目で訴えてくる。あの姿を大切にしていけないといけないと思います。私たちは、幼稚園に行く前の未満児を見ているのですが、お母さん方は、10月ごろになると、どこの保育園に入れるか、幼稚園に入れるか戦々恐々としている。認定こども園はいいことだと私自身は思います。幼稚園もあります、認定こども園もいいなと思います。現在は、どのくらいあるのですか。

(事務局) 中条まで入れると8です。

(委員) 朝陽さんが早かったですね。幼児教育が一番の根っこになって、小学校、中学、高校、大学って18歳になると思うのですが、いつも訴えたいのは、お母さん方に小さい子は目で訴えているので、よく観察していて欲しいのですが、この大切なことを今のお母さん方は、理解しておられない。子育て支援に来て、良い方もいるが、私たちに子どもを預けて、メールなんかをやっていて、高学歴になっているせいかもしれないが、不満なところがあります。人の話を聞かないし。しかし、子ども自身は本当にかわいくて、目で訴えたり、大人のしぐさを見えています。幼児教育が根っこになって18歳まで、そこへ学力をつけていくことが大切だと思います。長野市幼児期の教育・保育の在り方検討委員会ということで、これはいいことをやってくれると思いました。幼児教育、小さいときの教育が全てです。

(委員) 幼児期の教育保育の指針が作られる、今までもそうですが、指針や計画は広くて大きな先のものであるので、実際の保育現場や、家庭でそれを実際どう子どもに生かしていくかというところがとても弱かった気がします。とても、きれいですばらしい言葉で作

っていくのは、指針であるし、計画であるし、目標であるから当然なことなのですが、先を見通して、現場ではいったいどう生かしてやっていけるかというところまで、考えていけたら良いと思うことが1点。今、子どももそうだし、保育士、幼稚園教諭もそうですが、経験が少ないことが多いので、とにかく経験して、いっぱい失敗して体で覚えていく。笑われるかもしれないが、一昔前のような経験をたくさん入れた実践をしていって欲しいことが1点。それから、委員が仰られたように、幼保小の連携がとても大事で、自分の関わりだけで、仕事をしていくのではなく、前後の関係もしっかり学ぼうとしながら仕事をしていって欲しいと思うのと、その子を24時間の目で見て欲しい。自分は、園にいる時間だけ一生懸命見ても、家庭でどういう生活をし、どういう環境でいるかを知らないと、その子をきちんと育てていけないのではないかという気がしています。

(委員) 先ほど、委員が仰ったことを私も強く感じています。相変わらず小学校へ子どもが幼稚園から入ってくると、4月の段階では、なるべく早く帰すことを1週間くらいやりす。給食も、まだ慣れていないからといって、6年生が手伝いに来て、給食をよそってくれる。年長は、幼稚園の時には、リーダーとしてやってきたのに、そんなこと十分にできるから、早く帰すのは3日くらいで良いと何回も言ったのですが、相変わらず、今もやっている。幼稚園、保育園から入ってくれば、一つの壁としてあって、それで早く順応させたいという思いはあるのですが、子どもの成長は、大きなスパンでみていかななくてはならない。そこには、確かに乗り越えて欲しい壁は確かにありますが、小学校の先生は、早急にやりすぎている部分がある。学校の先生が言うことだから、子どもたちはそれを一生懸命守ろうとして、順応しようとしています。言うことを聞く小学校1、2年生のうちにはいいが、それがいつか、これ違うだろうと思う子ども達のエネルギーが、学級崩壊等に繋がっていく部分もあるんですね。子どもの思いを受け止めることが必要。だから、幼稚園や保育園まで、いったい子どもたちはどういう風にすごしてきているのか、どういう発達過程をすごしてきているのかということをお学校の先生方は、意外と知らないんですよ。自分の子どもが幼稚園に行っていたときのことを頭に入れながら、きっと、そうなんだろうなというくらいにしか、正直言ってわかっていない、というのが現実だろうと思います。幼保小連絡会をやっているけれども、ただの連絡会なんですね。こういう子どもが来るからとか、この子は、こういう問題を持っているということだけで、幼稚園や保育園でその子どもたちがどういう日々を過ごしているのかということを知らない。それで、小学校の先生方は、経験もしない。そこに大きな問題があるかなど。いわゆる小1プロブレムという問題が起こってくるのではないかと思うのですが。一方で、幼稚園、保育園の先生方は、小学校へ行ったときに、子どもがひとつの乗り越えなくてはならない壁として、小学校のシステムなり、学習の方法をわかっていっしょやるかどうか。それがある程度わかっていたら、それに対応した年長のシステムを少しずつ変えていくことが必要なんだろうなと思います。幼稚園の先生方も小学校に来て、何日か子どもたちも連れて行っても良

いと思うのですが一緒に過ごしてみるとか。小学校の研究会等に顔を出すのも必要ではないかなと。幼保小の連携を深くすべきだと思います。7月22日の信濃毎日新聞のコンパス欄に、秋山さんが投稿されています。「就学前の年齢期には知育偏重ではなく、子どもを温かい愛情で見守り、できなかったことが自分の力でできるようになるよう応援することが大切。また、子どもができるようになったら、一緒に喜んで、間違ったときには、しかるばかりではなく、どうすればいいのか愛情をもって教えることが大切だ。」こういう風に育てられた子どもたちが、結果、30年なり40年なりしたときに大きな差が出る、そんなことを話しております。18歳のときに結果を出せるか、そこまではなかなかいかない。教育っていうのは、もっと大きなスパンで考えていっても良いと思います。先ほども質問をしたのですが、C学力というか根っここの部分、土壌を豊かに育てる。そこに種をまいたときに、子どもたちが伸びやかに育っていく。そのC学力のところを私どもは、大事に考えていかなければならないし、その結果が実るのは、18歳なのかな、もうちょっと先なのかなと思いますが、そのところの部分、先ほど、未就園児の教育の部分でもお話があったが、その辺のところも大事に考えていかななくてはならない。大きな階段になると思います。

(委員長) 今出された、幼保小あたりのことで、意見交換したいと思いますが、いかがでしょうか。そういうことを一つ一つ整理しながら、この会として、一致できるのは、どういうことなのかを導き出せるのはすごく大事だと思うので。ちょうど、小学校の先生方もいらっしゃるし、それぞれ幼保小の関係のところでご発言いただきましたけれども、その辺にちょっと関連して皆さんのご意見をお聞きしたい。

(委員) 幼稚園、保育園の先生方は丁寧に、一生懸命、先生方は保育や幼児教育をやっている。丁寧に壁の飾りをやったり、その子たちにあった、教室の環境を整えていらっしゃる。意外と学校の先生方はそういう姿を知らないというのが現実ではないかと思います。

(委員) 始めはそうだったのですが、この3～4年でずいぶん変わってはきている、と思っています。

(副委員長) 幼保小が、ここ2～3年でだいぶ確かに変わってきています。非常に連携が取れるようになってきております。私どもは比較的、幼稚園から小学校へ行くことがあるのですが、小学校の先生方はなかなかお忙しいようで、なかなか時間が取れなくて幼稚園のほうに足を運んでいただけないと思います。

先ほど、委員からお話をいただいたが、幼稚園では、年長の5歳6歳は、一番上の子であり、姉妹交流で年少さん・年中さんの面倒をしています。そんなような、姉妹交流という形でやっていて、年長さんとなると、僕たちは、お兄さんお姉さんだからという感じで

すが、小学校に上がると、一番小さい学年ということで、子ども返り、赤ちゃん返りをしてしまう。そんなところが、幼稚園、保育園から小学校へ行ったときに子どもたちにとっては、だいぶギャップがあります。それが、もう少し解消されて、もう少し小学校の先生方が、幼稚園の年長の子どもたちの様子を見ていただければ、違うのかなとそんな感じがします。

(委員長) 制度的には、2008年の改正で保育所保育指針と幼稚園教育要領、それからたぶん同じ年だったと思いますが、小学校学習指導要領が全部改正になって、お互いにもっと連携をなさいということになりました。私は、東京なので、長野県でどうして、こんなに隅々に連携会議ができているんだろう、というところが、首都圏と全然違う。それをどう活かしながら、中身を交流していくかがこれから大事なのではないかと思います。制度的なところが、県のどこの市町村へ行っても、わりとちゃんとやっていますよね。長野市は、幼稚園、保育園から小学校へ行く数が多いので、結構また大変かもしれないのですが。逆に小学校の先生方から見たときも、いくつもの幼保園から入学してくるということもあり、小学校のほうでも課題があるんだと思うのです。ただ、システム的には変わってきているので、どうやって、中身も充実させるかという段階だと、伺っていて思いました。

そのことにもう少し、何かご意見等あれば。

(委員) 数年前のことですが、小学校の先生が、夏休みだと小学生がいない時期だからといって保育所に来ていただいて、一緒に給食を食べていただいたり、発達障害を持っている子どもに対して、保育士がどういう言葉がけをするとその子に通じやすいか、動きやすいかということと一緒に動きながら学んでいただいたことがありました。その子はとてもスムーズに、学校に繋げることができたときは、本当にうれしく思いました。

(委員) 5年ほど前までは、幼保小の連携が大変であった思いがあります。保育園で、卒園する子のいろんな育ちをがんばって書くんですが、学校の先生は忙しいのか、なかなか読んでくださらず、5月6月くらいになって、電話がかかってきて、「あの子、いったいどういう子なんですか。」ということがしょっちゅうありました。それが、今は、だいぶ改善はされてきています。そういった、幼保小の連携会議があるということと、小学校の先生方もいろいろ気を遣ってくださって、見に来てくださって、子どものいろいろな情報交換ができるようになってきました。数年前は、ある特定の小学校なのですが、学校の先生方が、1日実習に来るということもありました。学校の先生方はかなりお忙しい、やることがたくさんあるようです。私たちの現場もやるが増えて、なかなか時間が取れないという現実もあります。幼保小連携会議の形は整ったんですが、議論が深まっているかというと、まだそこまではいっていない気がします。公開保育や公開授業をするのですが、「あ、

いいですね。」という感じで、あれは一体どういうことなんだろうかといった、濃密な意見の交換まではまだまだできていない状況ですが、方向は良くなりつつあるのは感じています。

(委員) 私は、元は幼稚園の現場にいた人間ですが、学校の先生が幼稚園に来てくださる機会があって、この子どもたちの活動を見ていただいてお話したときに、幼稚園の職員と学校の教員では子どもの学びや発達についての見方にギャップがあるんですね。私も、小学校にお邪魔して、授業参観をさせていただいたのですが、やっぱり、幼稚園にいたときの子どもたちの学びという姿を見ているので、そこから小学校に入って2～3ヶ月でああこういう風に学習をするのかと、ギャップを感じることがあります。仕方がない部分もあるのですが、幼保小それぞれの発達感。それは、家庭も同じです。園でこんな風に育てて欲しいな、今、乳幼児期にこんな風に育てて欲しいなと思うことと、お父さん、お母さん、大変教育熱心な方が多いと思いますが、そこでお父さんお母さんが語る教育観との間にギャップがあるんですね。それぞれに、幼保も熱心に子どもたちを教育しているし、小学校ももちろんやっているし、家庭でも非常に熱心に教育しているんですが、その教育観がバラバラで、非常にギャップを感じる部分があります。それぞれの特徴があるので、すべて平らにならないけれども、何か大事なところ、子どもたちの発達を押しえた上で、今、どういう教育をしなければならぬのかという肝心なところでギャップがあると、なかなか教育効果が上がってこないと思うんですね。小学校は、何でこんなふうになっている、家庭は何でこうなんだ、幼稚園、保育園は何でこうなんだ、っていう風な議論になってしまうと非常に残念なところなので、まず、その辺、発達観、教育観をもう一度見直したらいいんじゃないかと考えています。

(委員) 先ほど、委員のお話を聞いて感銘というか、非常にそうだなと思ったのですが、私どもの園は、たまたま信大附属の隣にあり、行き来が非常に多いんです。中学校ぐらいになると職場実習で先生方が引率して毎日来るので、子どもたち自身が、中学生が幼児教育の現場にいることによって、何か違うものを学ぶ。今日の議題とは違うかもしれないのですが、養育性というか、人を育てることに対して中学生が学びの機会を持って帰っているという、すごく生き生きした感覚ですね。子ども、幼児と一緒にいるとき、毎年、中学校の先生が同じことを仰るんですけども、つんつんしている男の子が、「こんなことをするんだ。」と、びっくりして帰る。幼児教育の現場というのは、中学生にまた違う意味での力を与えるものを持っているんだなど。

先ほど、委員が仰った、家庭、私たち、地域の発達観、教育観というもの、何か今回は、その議題そのものになると思うんですけども、同じような認識なり、基盤を持てれば、本当に良いと思うんですね。特に幼児教育・保育をやっている者は、小学校・中学校の先生方、あるいは小学校そのものと、保護者は、どのようなスタンスで、どういうおつ

きあいをしていけばよいのか。今、俗に言われる、要求ばかりする、うちの子ばかりを何か優遇する、それで、先生方がストレスを感じておかしくなってしまう。それは、少し語弊があるかもしれないのですが、私たち幼児教育に携わっているものが、できれば、一番最初にニュートラルな状態で、先生たちとは、こういうスタンスで、要求だけするとか、批判だけするとかいうようなことではなくて、しっかりと子育てをスクラムを組んでやりましょうということを面談の中でしっかり保護者に伝えていきます。幼児教育の現場では、怪我をしたとか、させたとかそういうことは、非常に多いのですが、それを通じで「痛かったよね。」と、「このあいだやっちゃったよね。やっぱり、〇〇ちゃんも同じ心があって、痛く感じるし、いやだと思うんだよね。」と。これは繰り返しなんですね。でも、そのとき「お母さんそのときね、それがなかったら、個別に別室を置いて、まったく無菌状態で、そうやって帰すことはできないんですよ。」と。いろいろなお友達との関連があって、そこから学びがスタートしていく。そういうような発達観、どういうものを取得して、どういうものを失っていくのか、その発達の過程なり、教育で何を願って、何を援助していくのかということと地域として、話の基盤だけでも、同じ方向性をもっていたらすばらしいことだなと思います。

(委員長) 今のお話を聞いていて、副委員長からもありましたが、お店屋さんごっこなんか子どもたちが取り組んでいて、そういう中で子どもたち自身が文字の必要性を感じたりしてくるのです。何月何日どこどこでやりますというようなことを子どもなりの字で書いたり、自分たちで売る品物の値段を相談して決めたり、そういう何か遊びの中からもいろいろな文字というものの便利さとか、必要観みたいなものを獲得していくのではないかと思うのです。そういう、幼稚園・保育園の年長組くらいの遊びの中で、どんな力を身につけているのかということとこれから、指針案を作っていく中で、整理していくと、具体的な提言と言うよりは、その中で何を獲得しようとするのかということが見えてくると思いますが、今みたいな議論は、非常に有意義かなと、聞かせていただきました。

ひとつは、先程来ありましたが、私も大学で二十歳前後の学生たち、特に幼稚園教諭や保育士、あるいは児童養護施設の保育者になる学生の授業を持ったり、実習に行かせたりしているのですが、そのとき一番感じるのは、応用とか人とのコミュニケーションの難しさです。月並みな言い方をすれば、電話ができないとか、だから、いついつ自分が実習先にお伺いするのに、相手のことを考えながら対応ができる、自分の名前を名乗りながら、先方の先生方の都合を聞いてやるんだよ、みたいなことを担当の教授も話しているのですが、「もし、園長先生がいなかったらどうするの。」というようなことを担当の教授がからかったりすると、もう、学生はわからなくなってしまうたりして、そういうときに、「いつごろ電話したらよろしいでしょうか。」とか、そういう対人関係のコミュニケーションみたいなものが、本当にできなくなっていて、もちろんメールは、どんどんできるんだけど、そういうところが、二十歳前後の学生たちにとっては、本当に欠けているなど。

それを補うにはどうすればいいかなということは、結構大事な問題だと思います。先ほど、幼稚園の先生の方からお話がありましたけれども、親との関係もしっかり仲良くなるという中で、親も最初はどうも話せないけれども、そういう心配なことを先生方に相談しても良いんだとわかったりする中で、子育てがうまくいかないとそれが問題だということじゃなくて、失敗しながらそうやって一緒に育っていくんだというところが、おそらく幼稚園でも保育園でも培っていけないのではないかというふうに思いました。教育・保育の在り方の検討の中身をこういう場で議論できるということの大切さというか、要するに、幼稚園と保育園と認定こども園、学校、あるいは地域という変な壁を取り除いて、長野の子どもたちを0歳からどうしたら良いのかということ、かなり率直に議論できるこういう場が与えられたということは、すごく大事なことでありと話をしています。

その他のところで、事務局のほうからよろしくお願いします。

9. その他

(事務局) 次回の開催は、9月7日を予定させていただきたいと思います。協議内容は次第にございますように「長野市幼児期の教育・保育の指針素案」というものも示しながら、議論していただく予定をしています。

10. 閉会

(委員長) 委員の方々、ご質問等ありますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、第1回ということで、慣れない進行ではありましたが、皆さんからの率直なご意見ご質問が出されたことは良かったかなと思います。それでは、これで閉会とさせていただきます。